

僕はまだ未成年なので、僕にとって生きるということとは、家族や学校生活の中で、認め合ったり助け合ったりすることがほぼすべてといってもいいだろう。これがもし大人になって社会と関わるようになれば、たとえば自分の得意なことを生かしてお金を稼いだり、結婚して家庭を持つたりすることで、また違った意味をみつけることができるかもしれない。でも今は自分の意志とは関係なく環境が与えられている状況だからその環境にいる人たちの考えやレベルに合う・合わないだけで、自分の存在価値が左右され、それが生きることの意味と直結してしまうのだ。

僕の読んだこの本も、まさにここにテーマがある。僕の読んだ本は、

「」という本

で、「」

「」について書かれたものである。

この本の中で特に自分の心が動いた部分は、

「」

「」

「」

という部分だ。

もし僕がその状況だったら、

「」

と思うだろう。もしこれが

「」

「」

だったかもしれない。

本を読んでみた後、改めて自分のいる世界を考えてみた時、気づいたことが一つある。それは、自分は今何ができて、何ができないのかということ、どんな考えを大切にしたいくてどんな考えを違うと思うのかということをはっきりさせることが大切だということだ。悩んだり苦しんだりするのは、心のどこかで無理にまわりと合わせようとして、それができないからなのではないかと感じた。同じように、誰もが皆、自分の考えをしつかりと見つめ、ほかの人との違いを認められることが、様々な問題を大きくしない鍵なのかもしれない。